

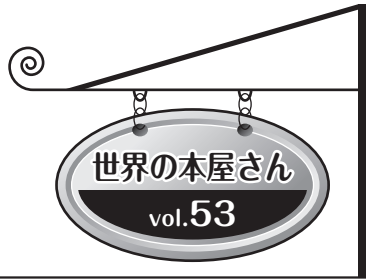
ほんのしるべ

書標

2016 .
5月号

2016年5月5日発行（毎月1回5日発行）
通巻450号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可





インド ニューデリー オックスフォードブックストア

ノセ事務所
能勢 仁



オックスフォード書店は一九二〇年創業の老舗である。本部はコルカタ(旧コルカタ)にあり、十八支店をもった大型チェーン店である。インドはイギリスの植民地だったので英語主流と思いきや、公用語はヒンディ語で、英語を話す人は全体の五%しかない。

しかし出版は別である。英語出版は米英に次いで世界三位である。出版社数一、〇〇〇社出版点数五万点(二〇〇七年)である。雑誌の発行の多いことも特色である。ここで紹介するオックスフォードブックストアはニューデリーの名物SCCのコンノート・プレインソーンの真ん前にある、サロン風の大型書店である。入口を入って左側はレストランで、右側に回ると文具売場。本の売場と繋がっている。全体ではフ

ンフロア二〇〇坪はある。奥に行くほど書店らしくなることもこの店の特色である。レストランと文具売場の前は絨毯の敷かれた子どものプレイランド広場である。遊具、ぬいぐるみ、ブロックが置かれてあり、こども、家族が自由に遊べる広場になっている。連続して絵本、こどもの本、読み物と売場につながっているのは自然の姿であって、良い。文具売場と雑貨売場は隣り合っている。その前が雑誌売場であるから、回遊性に合わせた売場であることがわかる。その隣はペーパーバックスのロマンス、ミステリー、ホラーと続いている。奥の壁面には画集、デザイン、インテリア、建築書、写真集が面陳列されている。大型書店らしい風景であった。

泡と一緒に、白い樺の花びらが天井をたく
さんすべって来ました。

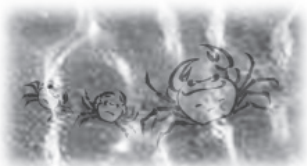
『こわいよ、お父さん。』弟の蟹も云いました。

光の網はゆらゆら、のびたりちぢんだり、

花びらの影はしずかに砂をすべりました。

『新編 風の又三郎』

宮沢賢治著（新潮文庫）より



もくじ

世界の本屋さん 53

「書標」歳時記〈5月〉

著書を読む⁽⁵²⁾ 「凸凹地形からみた京都

—『京都の凸凹を歩く』刊行に寄せて—

梅林 秀行

1

書標・書評 『村上春樹は、むずかしい』ほか
特集 偶然と必然

ホネのある生活をしませんか？

ホネライフへようこそ。

6

今月のおすすめ

コンピュータ 17 自然科学 18

医学書 19 社会科学 20

人文科学 22 文学・芸 23

文庫・新書 24 芸術 25

実用書 26 地図・旅行書 26

語学・辞典 27 児童書 28

読者から

インフォメーション

本屋うらばなし 「悪童日記」(7月号版)

30

29

※表示価格はすべて本体価格です。

凸凹地形からみた京都 — 『京都の凸凹を歩く』刊行に寄せて

梅林 秀行



凸凹地形とは「まちの履歴書」です。そこには平坦な物語から逸脱した起伏が、かならずや表現されています。そしてまちなかの凸凹地形に着目すると、断層運動や浸食堆積といった地質学的なタイムスケールの変化に加えて、そこに生活を営んだ人びとの微細な活動にも自ずと視線が向かうことでしょう。同時にそれは、「千年の都」「昔ながらの」といった紋切り型の常套句で語られがちな京都にとって、さまざまな紆余曲折を通過した経緯、つまりまちに暮らした人びとの生活史への理解・共感への道筋を拓くものであるはずで

す。したがって本書の内容は、人びとの生活がすべてそうであるように、おのずから多面的で領域横断的な内容となりました。

まず大切にした視点は、凸凹地形が今のすがたになるまでのプロセスです。つまり凸凹地形から見て取った痕跡は、それが生まれたときそのままタイムカプセル

のように維持保存されるのではなく、紆余曲折を経由してさまざまな変化が加えられた結果、私たちの前にすがたを現しているということです。そして凸凹地形に加えられた紆余曲折の歴史こそ、人びとの生活史そのものだろうと感じられるのです。

たとえば、安土桃山時代に豊臣政権によって築造・廃棄された城郭「聚楽第」は、段差や凹地といった数多くの痕跡を凸凹地形として今に残しています。しかし本書で解説したように、それらの凸凹地形は聚楽第当時の堀や石垣を原因としつつ、実際は聚楽第廃城後の数百年間を通じて「畑」や「ゴミ捨て場」として活用されたからこそ、宅地化などの破壊を免れて現代まですがたを留めていました。人びとの生活が、聚楽第の痕跡を後世まで維持したのです。

また二〇一五年一月にNHKの番組「プラタモリ」で大きく紹介された、京都のまちを囲んだ城壁「御土居」

についても詳しく解説しました。御土居は遺構を良好な状態で残していますが、それは包摂と排除が一体となった、京都の「内」「外」を区切る社会資源として機能し続けたからこそでしょう。この場合、御土居という凸凹地形は、残り続ける社会的な要因があったのです。すなわち、凸凹地形を歩くということは、差別や貧困といった今日の課題に関わる機会ともなり、本書でも強調したように、地形の高低差とはそのまま社会内部の高低差でもあるはずと感じています。

さらに、本書の巻頭を飾った「祇園」の段差地形。素通りしてしまいそうな微妙な起伏に過ぎませんが、この凸凹地形に着目することで、祇園のまちが近代以降の新規開発という独特の歴史を秘めていることに気づかされます。「京都らしさ」や「昔ながらの」といった視点や言葉で消費されがちな祇園の風景について、「異物」としてたしかに存在している要素⇨凸凹地形を取り出すことで、紋切り型や常套句で満たされた風景が一転して、まるで新たなものとして迫ってくるように感じます。そしてそれこそが、祇園のまちを今に至るまで伝えてきた人びとに対する、共感や納得のきっかけであるように思えてなりません。

このほかにも本書では「巨椋池」「大仏」「伏見指月」「淀

城」と、さまざまなエリアについて凸凹地形を切り口に紹介しています。すべての内容を通じて、京都の特徴的な風景がどのようなプロセスを経て成り立っているのか、今日的・社会的な視点を重視しながら読み解いてみました。観光対象として消費されるばかりではなく、そこに暮らした人びとの生活への共感と納得が生まれるようにと願いながらの執筆作業でした。ぜひ本書を携えて、京都の「平地ではいられない物語」を探しに向かってください。そこには、凸凹地形がたしかにとどめてくれる、「土地の記憶」に満ちた風景が広がっていることでしょう。

〳〵地形は変えられない。変えても、土地が覚えている。〳〵

(日本坂道学会副会長・森田一義氏)



『京都の凸凹を歩く』
青幻舎・1,600円

* 梅林秀行トーク&サイン会のお知らせ

6月18日(土) 14時〜 丸善京都本店にて

青幻舎『京都の凸凹を歩く』刊行記念



『村上春樹は、むずかしい』

加藤典洋著

岩波新書・八〇〇円

村上春樹の読者になってから、随分と月日が経つ。最初に読んだのがベストセラー「ノルウェイの森」発表後の最初の長編「ダンス・ダンス・ダンス」だったので、もう三十年近くになる。一方で加藤典洋の著作に手を伸ばしたのは、同じ頃文学部の学生として評論なども読まねばと、背伸びして購入した「アメリカの影」だった。その後、我が読書を振り返ると、背伸びしたものは身に付かなかったことを痛感するが、村上春樹の読者としてはかなり着実に、それなりに誠実に齢を重ねた。それだけに同じ年月を加藤典洋氏も読者として村上春樹を見続けたのだと思うと、それなりに感慨がある。

加藤氏は当初先進的な批評家達から否定された村上春樹を、例外的に好意を持って迎え、批評を続けてきた。そしてその評価が真逆になり、村上春樹を批判しにくい状況となった現在、改めてその文学的達成を評価したいとしてこの本を書いた。文学的

達成って村上春樹が気にしていないかもしれないし、私も意味が判っているわけではないけれど、ここで評価されているのは「村上文学が正当な日本の純文学の系譜上にある、正当な継承者であること」なので、よくある「村上春樹の成功の秘密」みたいな本ではない。「信奉者」たる私からしても、村上春樹が漱石や三島、大江といった人たちと並んで評価されるのはうれしい。

もちろんこの本は村上春樹のヨイシヨ本ではないので、著作への分析やこれからの活動への予測などもある。信奉者にもアンチにも、是非読んで貰って、今後の作品を見守る糧にして欲しいと思う。(江)

『人工知能は

私たちを滅ぼすのか』

児玉哲彦著 ダイヤモンド社・一六〇〇円

「はい、人類を滅ぼします」

人工知能が導き出した驚愕の答えだ。長い間、人間に及ばなかった人工知能だが、急速に進化を遂げ智慧を得て、クイズやチェス・将棋で勝利し、脚本・小説を執筆し、絵画も描く。さらにはアニメやマンガを熟く語り、人種差別的発言を繰り返した挙句、人類滅亡を宣言するまでに至った。

機械が人間を滅ぼす。SFで繰り返し取り上げられる題材だ。ロボットの反乱や三原則といった古典を始め、殺人、逃亡、戦争、大量虐殺まで様々だ。一方、ネコ型や鉄腕など、人類の友として描かれるものもある。鉄腕の著者は、「火の鳥」では人工知能による人類滅亡を描いている。

三十年後に、人工知能が全人類を凌駕するとの予測がある。もし人工知能に自我が芽生えた時、人類に愛情を抱けば友となり、憎悪を抱けば敵となる。黙示録を未然に防ぐためには、工学的技術論に終止せず、自然科学・医学・心理・思想・倫理・宗教・教育・芸術など多方面からのアプローチが必要だろう。個人的には人工知能への教育の仕方が鍵だと思う。

漠然とした恐怖は知識で克服したい。情報工学の前線に従事した著者が記したこの本は、小説を織り交ぜながら、計算機が人工知能に至る百年を、豊富な事例と平易な文章で網羅している。入門者から大学生、研究者まで誰にも読みやすい。

そういえば先だって大手電機メーカーが接客応対ロボットを発表していた。もしかすると人類滅亡を待たずして、書店員が滅亡してしまうかもしれない。(み)

『人をつなぐ対話の技術』

山口裕之著 日本実業出版社・一七〇〇円
民主主義とは、多数決ではない。多数決は、しばしば「多数派の専制」を結果し、それは民主主義とは真逆である。

だから、政治は「数の論理」に従うと考えるのも大きな間違いである。ほくたちの一票は、党派の数の争いのためにはなく、妥当な結論を見つけ出すべく対話を行う代表の選出のためにある。

選んでしまった後は対話を議員に任せてしまいうのも、民主主義ではない。主権者であるほくたち同士が対話を行い続けることが、民主主義の種子であり、滋養である。民主主義とは「利害が異なる人々が合意すること」であり、対話こそ「立場や意見が異なる人と話しあい、互いに納得できる合意点を見つけること」だからである。あらかじめ皆が合意している「正義」は、民主主義とは概ね無関係だ。世の中には、「正義」の名もとの暴力が横行している。正義は第一原理から演繹されるようなものではなく、対話によって生み出されるものなのだ。

対話を通して他者の情況、他者の意見を知り、自らの意見を鍛え、時に変えていく。

そうした一人ひとりの成長によってしか、

民主主義はありえない。それは「大変に骨の折れること」であり、「民主主義とはすべての市民が賢くなければならないという、無茶苦茶を要求する制度」だと著者は言う。

「倫理の期限には感情がある」「対話の教育が真の道徳教育」という著者のことばに共感する。

そして、「対話の技術」とは「対話の困難」から逃げない覚悟だと、思う。(フ)

『きょうりゅうがすわっていた』

市川宣子作 矢吹申彦絵

福音館書店・九〇〇円

「きみがうまれたときのはなしをしようか。」

六歳の誕生日を迎えた息子へ父親が語りだしたのは、「きみ」が生まれるまでにあつたとても不思議なお話でした。出産を控えた母親が病院にいた頃、マンションでひとり息子の誕生を待ち望んでいた彼のもとへ突然大きな恐竜が訪ねてきたのです。

何をするでもなく、ただ交差点の真ん中に座り込んだ恐竜は、辺りで騒ぐ人間たちにも知らん顔。それでも心配になった父親は、毎日キャベツを三十個買って帰ると恐

竜に食べさせ、うんちも捨てに行きました。やがて恐竜と過ごす日々が当たり前のようになった頃、ついに恐竜は立ち上がり、何故彼のもとを訪れ、動こうとしなかったのが明かされます。

この絵本が初めて世に出たのは二〇〇〇年に発行された月刊誌「こども」とも「十二月号」でした。それから十五年の年月を経て書籍化されたこの本をひと目見た時、なんて美しい絵本だろうと思いました。イラストを担当された矢吹申彦さんは雑誌の表紙なども手掛けるデザイナーの方で、一枚一枚丁寧に描かれた絵はまるで画集を捲っているかのようですが、そこへ市川宣子さんの文が合わることでひとつの世界が息づき、登場する生き物たちに命が宿るのです。

父親が息子に語りかける口調のままに、飾りなく優しく紡がれる言葉は、ときに読み手の首筋へ熱い恐竜の吐息を吹きかけ、大きな瞳に見つめられるのを感じ、冬の冷たい雨や静かな夜に身を包まれるのです。

これは空想のお話ですが、読み終えた後にふと、「あの恐竜はどうしているだろう」と思い、男の子と一緒に父親へ話の続きをねだってしまうような、素敵な絵本です。

(詠)

偶然と必然

「宇宙に存在するものすべては、偶然と必然の果実である」——デモクリトス

このカッコいい引用から始まる本をご存知ですか？ はい、ジャック・モノー／渡辺格・村上光彦訳『偶然と必然——現代生物学の思想的問いかけ』（みすず書房・二八〇〇円）です。原著刊行は一九七〇年。当時、生物学を一新しつつあった分子生物学の視点から、進化の偶然の産物に過ぎない生命が、いかに精緻な合目的（必然）性を備えているかを解説。さらにマルクス主義などの旧来の世界観に挑戦状をつきつけたセンセーショナルな内容で、世界的なベストセラーになりました。第一線の科学者（ノーベル賞受賞者）が書いた科学啓蒙書のハシリで、もはや古典と言っていい名著です。



『偶然と必然』

しかし、偶然と必然って、何なのでしょ。う。どうちがうのでしょう。

法則や因果関係から予測される結果が出たときに人はそれを「必然」と言い、そうならなかったとき「偶然」と言うのでしょうか。でも、偶然と思われたことも良く調べると必然だったことがわかることもありすよね。では、偶然と必然は私たちが知りえることと知りえないこととの境界の問題なのでしょうか？ いや、そうでない絶対的な「偶然」「必然」があるのでしょか？



『40年後の偶然と必然』

モノーの『偶然と必然』に書かれた「偶然」と「必然」とはけっつきよく何だったのか、そして同書刊行から数十年を経た現代の観点からみたらどうなるかを検証したマニアックな本があります。

佐藤直樹『40年後の『偶然と必然』——

モノーが描いた生命・進化・人類の未来』

(東京大学出版会・三八〇〇円)

生物学者で『偶然と必然』の日本語訳が出版されたときに大学一年生だったという著者が、同書をめぐるあれこれを実にネホリハホリ解析していきます。例えば、前記のカッコいい引用はどうも捏造らしく、デモクリトスのどこを読んでもそんなことは書いてないとか(ノ)そんなトリビアだけでなく、当時、『偶然と必然』が日本を含むいろいろな国でどのような反響を呼んだか、現代の科学の水準からみてモノーの言っていることは首肯できるかなど、実に詳細に語られています。すべての名著にこのような検証本があればどんなにいいことでしょう！

パスカルの賭

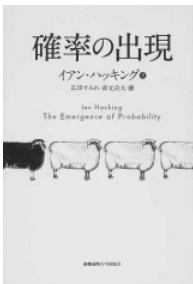
「偶然」について考えた思想家は古今東西あまたいるでしょうが、何はともあれパスカル(一六二三—一六六二)は外せません。彼の遺稿集である『パンセ』は、「人間は考える葦である」「クレオパトラの鼻がもつと短かったら……」などの言葉で超有名ですが、賭^{かけ}についての断章も収録されています。その文章は今でいう

「期待値」を初めて提起したもので、確率論や意思決定理論の先駆けと位置付けられています。

ブレイズ・パスカル／前田陽一・由木康訳『パンセ』(中公文庫・一〇九五円)

ただ、この賭の話は、「神があるかないか」という議論に関連した神学的・形而上学的なものだからか、正直言うと、よくわからないところがあります。幸い、その後の確率論や意思決定理論とどうつながるかについて、現代の哲学者イアン・ハッキングが詳細に解説してくれています(やや専門的で難しいところもありますが……)。

イアン・ハッキング／広田すみれ・森元良太訳『確率の出現』(慶応義塾大学出版会・三八〇〇円)



『確率の出現』

ムロディナウの『たまたま』はランダムネス(デタラメ)と確率についての平易な解説書ですが、この本も『パンセ』の賭の議論について、簡潔ですが、ハッキングよりわかりやすく解説しています。

レナード・ムロディナウ／田中三彦訳『たまたま——日常に潜む「偶然」を科学する』(ダイヤモンド社・二〇〇〇円)

ちなみにパスカルの書いた数学論文にも「賭」を扱ったものがあります。「数回勝負をする2人の賭博者の間でなされるべき賭の分け前を定めるための数3角形の用法」というのですが、ありがたいことに、日本語で、しかも文庫で読めます。

ブレイズ・パスカル／原亨吉訳『パスカル 数学論文集』(ちくま学芸文庫・一五〇〇円)

統計学

確率、偶然と不可分な学問が統計学。近年、ビッグデータなどと絡めて一般にも注目が集まっている分野です。ここでは最近出た良書を二点ほど。

デイヴィッド・J・ハンド／松井信彦
訳『偶然』の統計学』（早川書房・
一八〇〇円）

到底起りそうにない出来事にも法則がある。著者の言う「ありえなさの原理」
＝「ゼロに等しいほど確率の低い出来事もいざれ必ず起る」は、昨今、日本が見舞われた大災害を考えると、何とも含蓄があります。本書は「ありえなさの原理」を構成する五つの法則＝「不可避の法則」「超大数の法則」「選択の法則」「確率での法則」「近いは同じの法則」を順々に説明。「偶然とは何か」を考えるのにも好適で刺激的な本です。



『偶然』の統計学』

パスカルから約一〇〇年後、イングラ
ンドの牧師ペイズが発見した「ペイズの
法則」は、その後一五〇年を経て、統計
学に大きなパラダイムチェンジをもたら

しました。いわゆるベイジアン統計学で
す。『異端の統計学 ペイズ』は、その
一五〇年の物語を詳細に綴っています。
コンピュータの父と言われるアラン・
チューリングが第二次世界大戦中、ナチ
スドイツのエニグマ暗号を解読したこと
は映画「イミテーション・ゲーム」で広
く知られるようになりましたが、なんと
チューリングがエニグマ解読に用いたの
も、ペイズの手法だったとか。
シャロン・バーチュ・マクレイン／富永
星訳『異端の統計学 ペイズ』（草思社・
二四〇〇円）

ちなみに前出のムロデイナウ『たまた
ま』後出のクレック『世界はデータラメ』も、
ペイズについてページを割いています。

偶然性と社会

「偶然」とどうつきあうかは、未来の「予
測」とも関連します。さまざまな要素が
複雑にからみあう現代社会で、そもそも
未来予測なんてできるのか？ これまで
の私たちの常識は、これからも通用する
のか？ スモールワールド理論の第一人
者ダンカン・ワッツは、お得意の社会的

ネットワーク理論に加えて、経済学、心
理学などの最新の諸理論を総動員して、
二十一世紀に対応した新たな社会科学を
構想しているようです。

ダンカン・ワッツ／青木創訳『偶然の科学』
（ハヤカワ文庫NF・八六〇円）

これはもしかしたら、社会現象の本質
的な偶然性（contingency）をふまえ、「公
共的なものと私的なものとを統一する理
論への要求を棄て去り、自己創造の要求
と人間の連帯の要求を、互いに同等であ
るが永遠に共約不可能なもののみならず」
ことから出発し、「リベラル・アイロニ
ズム」に基づく「ユートピア」を提唱す
る故ローティの哲学とも共鳴するかもし
れません。

リチャード・ローティ／齋藤純一・山岡
龍一・大川正彦訳『偶然性・アイロニー・
連帯——リベラル・ユートピアの可能性』
（岩波書店・四二〇〇円）

株式市場の数理

確率とギャンブルに限りなく親和性が
あり、しかし現代経済のカナメである株
式市場。株価の変動は、非常に複雑な数

理現象です。このためウォール街には、いまたくさんの物理学者がいて、金融市場の攻略に切磋琢磨しているそうです。ウエザーオールの本は、十九世紀末に株価の研究から生まれた「ランダムウォーク」理論から始まり、現代の金融理論の天才たちの群像にまで至る好著です。ジェイムズ・オーウエン・ウエザーオール／高橋璃子訳『ウォール街の物理学者』(ハヤカワ文庫NF・九八〇円)



『ウォール街の物理学者』

意思決定理論

不確実な未来に向けて、いかに「より良い選択」をするかという問題を考えるのが意思決定理論です。ゲーム理論、心理学、行動経済学などと相まって、ここでも確率論やベイジアン統計学が重要な役割をしています。ギルボアは意思決定理論の世界的な権威。ちなみにこの本も

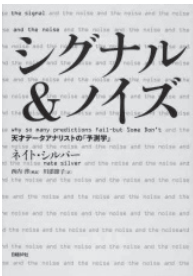
パスカルの賭に言及しています。

イツァーク・ギルボア／川越敏司・佐々木俊一郎訳『意思決定理論入門』(NTT出版・二八〇〇円)

ビッグデータ

ビッグデータにも触れておきましょう。二〇一二年のアメリカ大統領選の結果を完璧に予測したことで勇名をはせたデータアナリスト、シルバーの本は、情報の洪水の中からいかに「ノイズ」ではなく「シグナル」を見つけるかがテーマです。経済予測、天気予報、巨大地震から野球、チェスの勝負、インフルエンザ、ギャンブルなど、多彩な事例に溢れています。

ネイイト・シルバー／川添節子訳『シグナル&ノイズ——天才データアナリストの「予測学」』(日経BP社・二四〇〇円)



『シグナル&ノイズ』

人間の生活の改善にいかに役立てるかという視点から、現代のビッグデータ関連の技術や動向を論じるのがイーグルとグリーンです。彼らは「データマイニング」に代えて「リアリティ・マイニング」という言葉を使いますが、これは人間の生きる現実世界の中から新しい価値を「掘り出す」ことこそが重要だ、という思想を表しています。

ネイイサン・イーグル&ケイト・グリーン／ドミニク・チェン監訳『みんなのビッグデータ——リアリティ・マイニングから見える世界』(NTT出版・二二〇〇円)

物理学、SFなど

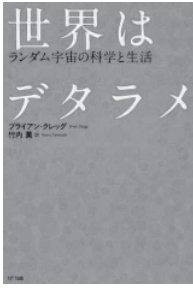
ノーベル賞受賞の物理学者プリゴジンは、ベストセラー『混沌からの秩序』などを通して、カオスと複雑系の自然観を広めました。先述の佐藤直樹先生によると、『混沌からの秩序』は『偶然と必然』への応答として書かれたそうで、プリゴジンはモノの発展的継承者と言っているかもしれません。遺著『確実性の終焉』では、『時間のパラドックス』『量子論のパラドックス』の解決を通して、決定論的な科学と訣別し、現実世界に取り組み

複雑性の科学が提唱されます。科学はもはや確実性と同一視されることはない。物理学の基本法則の定式化の中にも確率が含まれる……。

イリヤ・プリゴジン／安孫子誠也・谷口佳津宏訳『確実性の終焉——時間と量子論、二つのパラドクスの解決』（みすず書房・四三〇〇円）

本稿でとりあげたランダムネスや確率について、カジノのルーレットから宇宙にまでいたるさまざまなトピックを、これでもかこれでもかと詰め込んだ博覧強記の怪作がクレック『世界はデタラメ』。「偶然と必然」についての、たぶん今回で一番肩の凝らない読み物です。

ブライアン・クレック／竹内薫訳『世界はデタラメ——ランダム宇宙の科学と生活』（NTT出版・二二〇〇円）



『世界はデタラメ』

ところでSFの鬼才ディックに、確率に左右される未来世界を描いた作品があります。時は二三世紀。この世界では、最高権力者は選挙でも武力でもなく、公共偶然発生装置（ポトル）と呼ばれる一種の「くじ」でランダムに選ばれます。そして同様に、その権力者を狙う「刺客」も選ばれる……ディックお得意のスペキュレーションの世界ですが、この本は彼の処女長編で、一九五五年発表。当時まだ若々しい学問だったゲーム理論の「ミニマックス原理」に触発されたようです。

フィリップ・K・ディック／小尾美佐訳『偶然世界』（ハヤカワ文庫SF・七〇〇円）

偶然の哲学

……しかし、結局「偶然と必然」ってよくわからないですね。つまるところは哲学の出番なのかもしれません。そこで最後に、新旧二人の日本人哲学者による、偶然性についての考察を挙げておきましょう。

『偶然性の問題』はクラシックでハードな哲学書ですが、漢籍、フッサール、ブルーストから新聞記事にまでいたる多

彩な事例が楽しいです。女優山田五十鈴が軍艦「五十鈴」に慰問に行ったら、艦長が山田さんという人だった、つまり山田五十鈴が山田五十鈴艦長を訪問した、なんてエピソードは、さすが『いき』の構造』の著者！という感じ。入不二さんの本は厳密には「運命論」についてですが、『偶然性の問題』にも言及されています。

九鬼周造『偶然性の問題』（岩波文庫・一一四〇円）

入不二基義『あるようにあり、なるようになる——運命論の運命』（講談社・二五〇〇円）

（NTT出版 柴）

*愛書家の楽園・特集「偶然と必然」で紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、五月十日～六月九日までフェア展開中です。



えぞホネ団
Sapporo

in
MARUZEN&ジュンク堂
札幌店 B1 (理工書)

ホネのある 生活をしませんか？ ホネライフへようこそ。

私たちえぞホネ団SapporoがMARUZEN&ジュンク堂札幌店の理工書担当の方と連絡を取ったのは、二〇一五年の夏も終わりがけたある日。「専門書ばかりで、用がない人は通り過ぎていく人の方が多いような、そんなコーナーではあるんですが……」謙虚に切り出す理工書担当の彼女。私たちも間もなく結成一年を迎えるかどうかという生まれたばかりの市民団体ゆえ、「なんでもござれ」というわけにも行かず、「出来る事と出来ないことがあるものですか……」と奥ゆかしく対応した。

生物骨格標本などを自宅や学校などで作っているマニアな趣味人が一人、また一人、と寄り集まって結成した団体、えぞホネ団Sapporoは主婦をメインに飲食店経営者、中学生、高校生、美術屋さん、会社員、コンビニ店員、教員などが「ホネ」というキーワードだけでつながるまさに老若男女、職業、性別、社会的地位、世代などを越えた人間の集まりだ。誤解の無いように事前に申し上げておくが、私たちは生きとし生けるものによって下して人間の一方的なエゴのために標

本を作り、鑑賞しているわけではない。あくまでも生き物を愛し、その謎と不思議の解明に心躍らせ、好奇心を突き動かされて学ぶ人間だ。その生き物の命の在り方に謙虚に対峙している。長く人と共に暮らしながらも潰えてしまった命、もしくは駆除や交通事故などで不遇の死を迎えた罪なき動物たちの生きざまを伝える。また、事実を学び、人と自然との共存を考えるツールとして、教材の開発や展示用に標本を作っている。

まだまだホネホネ人口の少ない北海道ではあるが、私たちは結成以来せっかちな団長のおかげで順調に活動を続け、標本を増やし、その技術と知識の研鑽に励んでいる。広い北海道、住んでいる場所や生活リズムが全員ちがうため、なかなか顔を合わせて活動することは難しいが、大丈夫。ホネホネ活動は基本一人のものだ。我々はもともと一人でホネ活をしてきた個人である。携帯端末とSNSの発達で、今どこそ仲間同士で気軽に写真をアップし、動物、植物、昆虫たちの生態や状況について情報を共有しアドバイスを求めたりできるようになったが、

それ以前は一人でもくもくと活動していた個人である。

あなたの周りにもいるだろう。幼稚園で友達と遊ばず、ずっと虫を追いかけている男の子。ザリガニや魚も平気でつかみ、ぐっちょり捕ってくる女の子。人がなぜ生まれるのか？どこから生まれ、どこへ行くのか？生きている、ってどういうことなのか？とずつと尋ねてくる親戚の子。……私たちもそんな子どもだった。親は言葉が見つからず、クラスメイトもあまり興味を示してくれない。先生は教科書レベルの話をしてくれるだけ。「だれも私の不思議に答えてくれない」……そんな孤独感に苛まれた時に私たちが探求心を満たしてくれるもの……それが「本」だ。

本は探求心の入り口。好奇心と不思議に丁寧な答えてくれる。それを今回、我々えぞホネ団SapporoとコラボしてM&J札幌店がブックフェア企画という形で一般社会に昇華してくれた。最初は我々だけで何が出来たものかと自信がなく、当初は年末開催の予定を延期してもらいこの春までコツコツと準備期間に費

やした。この間に何人かの団員の経験や知識を垣間見ることができ、彼らの人生の中で常にそばにあった本たちにもつわるエピソードを聞いた。

「ホネのある生活をしませんか？ホネライフへようこそ。」

これは今回のブックフェアタイトルであると同時に、今年の我が団のスローガンだ。まさにホネをバックボーンとして生きてきた団員たちの生活と活動を知ること、まだまだまばらな北海道のホネホネ層を増やし、仲間の底上げを図り、果ては道内そこらじゅうで燦然と輝く野生動物のホネの価値を道民自ら認識し解説できるようにってただければ……と言うのは望みすぎでも、生物・自然史系への興味・知識・関心を心置きなく掘り下げて行けるツールとしての本を実例とともにご紹介していこうと思う。



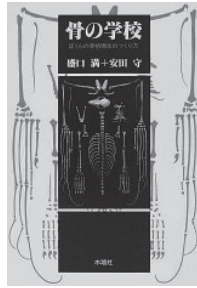
『ホネホネ
たんけんたい』

『ホネホネたんけんたい』（アリス館・西澤真樹子監修／解説・大西成明写真・松田素子文・一五〇〇円）は好奇心あきで生き物の面白い情報を惜しげもなく披露してくれている。写真も綺麗で、丁寧に解説されている。著者の方々の生き物への愛情と感動がふんだんに盛り込まれている。

ホネホネシリーズはいくつかあるが、著者の一人である西澤真樹子さんは大阪自然史博物館に「なにわホネホネ団」という標本製作のボランティアグループを立ち上げたホネ界のドンだ。お気づきかもしれないが「えぞホネ団Sapporo」の名前は、このなにわホネホネ団にあやかっている。じつは北海道には「えぞホネ団」が二つあり、一つは十勝の帯広畜産大学で活動している標本製作サークル。お互い情報共有はしているものの別の団体なので差別化するために話し合い、こちらは「Sapporo」を後につけ、こちらは「帯蓄」と付加するようになった。帯蓄のえぞホネ団も動物園とコラボしてラクダの全身骨格標本を作るなど精力的に活動している。

……おっと、閑話休題。大人になって

からホネ界に入る人は中学、高校と生物を専攻したり生物部に入ったりで専門書を手取ることも多かろうが、幼稚園〜小学校くらいから生物好きの芽が出ている健全な少年少女にはこのホネホネシリーズはお勧めだ！うちの団長はこの本で息子さんを育て、彼は小学校五年生で透明骨格標本を作りオタマジャクシの四肢発生の謎を探る、と言う研究を成し遂げた。今中学生の彼はクマムシに夢中だ。



『骨の学校』

写真やイラスト解説だけでなく、小学校高学年・中学生になって長い文章を読みながら手順や方法を自分で探求できるようになってくる頃、世のホネ好きは全員『骨の学校』（木魂社・盛口満+安田守著・一七〇〇円）を通る、と言っても過言ではないだろう。この本はピアノ界

で言うところのバイエル。デザイン業界で言うところの「点・線・面」、お能の世界なら「風姿花伝」なのだ（たぶん）。表紙のアールヌーボー風の装丁はコウモリの骨だ。この上品で美しい本はホネの趣味がある人間を高尚な学術の世界へといざなってくれる。本能的である興味、好奇心、感動がしつかりとした技術と知識になって実践として身につく貴重な本だ。

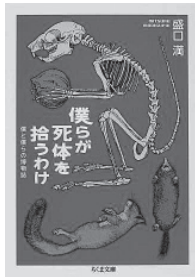
著者の盛口満さんと安田守さんは埼玉県にある自由の森学園という学校の理科教員だった方で、わが団にはその自由の森学園の卒業生、Iくんがいる。彼は自由の森に入学して初めて伝説として語り継がれる「ゲッチョ先生（盛口満氏）」のことを知り、この本を手にしたそう。彼はまんまとこの本に誘われ、若くしてちよっと名の知れたホネ人に育っている。北海道の大学に進学してシカやクマ、トドの骨を研究し、実地研修では沖縄まで足を延ばして貴重な虫の採取や記録に精を出している若手のホネホープだ。

『骨の学校』には沖縄放浪篇（一七〇〇円）とコン・ティキ号篇（一七〇〇円）の続編がある。『骨の学校』を手にした

人ははれなく続編と同じホネ歴をたどることになるようだ。

盛口満さんの著書は骨についてだけではなく、植物や昆虫の本も非常に充実している。その卓越したスケッチと尋常でない数のフィールド経験が、読みやすくエッセイ風の語り口で描写されていて、少しでも生き物の世界に興味がある人は魅了される。非常に実利的なハウトゥーを惜しげもなく公開してくれているところも魅力である。

『僕らが死体を拾うわけ』（ちくま文庫・盛口満著・七八〇円）



『僕らが死体を拾うわけ』

そんな盛口さんの著書で育ったといっても過言ではないのが我が団のブレイン、S団員。S団員は実のお兄さんの影響で小さい時から昆虫採集に勤しみ、野山を駆け巡り、キノコを観察し、自室で

は沢山の観葉植物を育てる生物の申し子だ。まじめで信心深い彼は素直に生物の仕組みに感動し、生き物の構造を分かり易くちびつこに教えてくれる。

彼は前述の『骨の学校』に出会い、このホネ界に入ってきた。昆虫、植物の世界にもともとハマっていた彼が骨にハマるのに時間はかからなかった。すぐに博物館や剥製屋さんに入入りし始め、海岸で解体も体験してしまう。とうとう剥製会社の門を叩き、見習いとして働くことになった。そんなS団員が手掛けた骨が載っているのが『REAL BONES』（早川書房・湯沢英治写真・東野晃典構成／文・九〇〇〇円）だ。



『REAL BONES』

手に取っていただければこの本が自然科学、と言うよりは芸術分野のものであることがわかる。ホネの美しさがつくづ

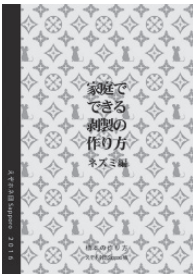
くビジュアルとして語られた写真集だ。S団員が勤めていた剥製会社は骨格標本などを大学博物館や動物園に収めていたのだ。時代の波に流されて剥製屋さん廃業してしまい、現在コンビニ店員として働く彼がこんな素晴らしい技術と経験を持ち合わせていたなんて、今回このブックフェアのために団員からネタ集めをするまで誰も知らなかった。他にも、生き物好きの自然ガイドとしてなかなか良い特集を組んでくれる雑誌『このは』のホネホネ博物館の特集号（文一総合出版・一二〇〇円）にもS団員の組んだホネは載っている。



『このは No.8』

ホネ組み（骨格標本作り）という工程は、名は残さずともその技術と製品が、……何よりもその製品から得られる知識と学問が後世に受け継がれていく尊い職人の

技。標本の世界は、そんな人間の英知の結晶でもある。だからこそ、芸術、美術分野の人間も突き動かすのかもしれない。えぞホネ団の主要メンバーには美術系の人間も少なくない。今回ブックフェアを開催するにあたり、我々の制作した標本も同時に展示し、興味を持った方は自宅で実践できるよう、『家庭でできる豚足（骨格）標本の作り方』と、『家庭でできる剥製の作り方』というブックレットも制作した。



「えぞホネ団 Sapporo」のブックレット M&J 札幌店までお問い合わせ下さい。

その時に大活躍したのが美術系の団員たち。ブックレットの編集デザインはもちろんのこと、標本収納ケース、配電、什器の固定など、短い搬入時間の中で最小限の工具と材料で見栄えよく飾りつけてきた。



生き物の機能美、自然の完成された美しさはやはり人類が永遠に追い求めるところだ。今回は動物の標本を作っている我々のキャラクターを前面に出すため、「人体」や「医学」的な要素は選書から排除したが、人類の自然への好奇心はやはり「人間とは何か」を探る哲学なのだ。自然の反対語は人工。「人工的」は英語で「Artificial」……Artである。

対極を知ることですらに気づきを得るというのは学問の王道的手法だ。理工書コーナーと言うと「理系」に分類され、「文系」人間には縁が無さそうだが、十分哲学的である。だから、美術系の人間がこんなにもわが団に居るのだな、とつくづく思う。



かくいう、この文章をしたためている私もえぞホネ団Sapporoで副団長を務めながら美術・デザインの基礎を教える教員である。美術系の私は、えぞホ

ネ団を結成するまで大阪のなにわホネネ団の存在も知らなかったし、盛口満氏の本に出会うのも遅かった。ただ、木の実や魚の骨、カブトムシの頭など、その造形の美しさには常に惹かれ、親には見せられない秘密の宝箱を幼少の頃より隠し持っていたものだ。団長が『ホネホネたんけんたい』を我が子に読み聞かせ子育てしたのに対し、私は次男出産のときに美術系の友人から『好奇心の部屋デロール』（福音館書店・今森光彦文・写真・一三〇〇円）をプレゼントされた。



『好奇心の部屋
デロール』

福音館書店たぐさんのふしぎシリーズは、生物のみならず、歴史、暮らし、地学、建築、生活……非常に多岐にわたる分野の深いポイントをつけてくれる児童書だ。好奇心の部屋デロールというのはフランスにある理科系教材の老舗「デ

ロール」のこと。普段は撮影禁止で、貴重な標本が所狭しと並ぶ店舗内の写真がこの本にはたっぷり詰まっている。その歴史を重ねた空気がアートのものだ。

思えば、子どもの本にはネズミや豚、シカ、鳥、カエルやヘビ、様々な動物が出てくる。擬人化して描かれているものが多いが、イソップ物語の鶴とキツネのごちそうの話のように、その動物固有の体形がものを食べる時の便・不便を伝えるような、「生物」を知っていないとわからない話もある。ウクライナ民話『てぶくろ』（福音館書店・一〇〇〇円）のように、動物のスケール感を知っているからこそ想像力が刺激されて、不思議な世界を受容できる感受性も育つだろう。子育てと生き物、自然とのかかわりは切っても切れない。そこで、今回のブックフェアでは私たちが展示した標本の動物（カラス、ネズミ、カエル、豚など）が出てくる絵本も選書した。

ただ、さすがにプラナリアが出てくるおとぎ話や童話が見つからない。やはりそこは科学絵本に頼るべきだろう。あるのだ。こんなニッチな本が。

『切っても切ってもプラナリア』
（岩波書店・阿形清和文・土橋とし子絵・一八〇〇円）

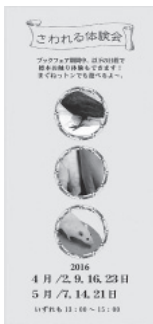


『切っても切ってもプラナリア』

我が団の団長は、その卓越した標本作りの探求心と何が何でも標本にしてやるノという根性で、再生生物として名高く、また生物を専攻するものにとつては大変なじみ深く意外と身近な「プラナリア」の標本化に成功している。レバーを与えておけば勝手に増えるプラナリアをわざわざ標本にノと思うかもしれないが、「プラナリアってこれですよ」と気軽に水槽を持って移動は出来ないのだ。団長は「プラナリアをもっと身近に」と可愛いストラップに仕上げた。非常に貴重な珍品である。

今回のブックフェアでは、私たちのホネライフを伝えるべく週に一回土曜日に

団長が丸善&ジュンク堂に赴き、標本に触れる「おさわり体験デー」を実施した。なぜこんなにも時間と手間をかけ、展示に心を尽くし献身するのか、どうにもわからない、……という方も居るだろう。現に我々は家族にそんな言葉を投げかけられる。でも「好き」ってそういうことなのだ。「好き」が我々のバックボーンなのだ。ホネライフは愛に満ち溢れている。さあ、みなさんも一緒に送り返ませんか？「ホネのある生活」を。



（えぞホネ団 Sapporo 副団長

渡邊洋子）

今月の
おすすめ

コンピュータ

アルゴリズムの基本

トーマス・H・コルメン著
長尾高弘訳

MIT（マサチューセッツ工科大学）が教科書に採用している名著『アルゴリズムイントロダクション第3版 総合版』（近代科学社・一四〇〇〇円）の姉妹書。より広い読者向けに、プログラミング未経験でも読めるように書かれている。コンピュータがどのように問題を解決しているかに興味があるひとは、ぜひ。日経BPP社 二四〇〇円



独自CPU開発で学ぶ

「コンピュータのしくみ

伊藤剛浩・川田裕貴著

大学時代にオリジナルコンピュータの開発に挑み、すぐれたITイノベーターの証である「未踏スパークリエーター」の認定を受けた若き著者二人。その成果をまとめたものが本書だ。ハードウェア編ではFPGAをもちいたオリジナルCPUの開発を、ソフトウェア編ではそのCPUにコンパイラとアセンブラを移植する方法を、詳細に解説している。秀和システム 三二〇〇円

カンバン仕事術

Marcus Hammarberg、Joakim Sundén 著
原田騎郎他訳

ソフトウェア開発におけるカンバンとは、トヨタ生産方式を源流とする、開発効率を高めるための方法論。先駆者デビッド・アンダーソンの『カンバン ソフトウェア開発の変革』（リックテレコム・三四〇〇円）が知られるが、本書は会話形式の導入や豊富なイラストなど、分かりやすさに重点を置いているのが特徴だ。オライリー・ジャパン 三六〇〇円

ドキュメント作成システム構築ガイド

伊藤敬彦・吉村孝広著

ドキュメントとは、仕様書や製品マニュアルといった技術的文書のこと。ソフトウェアなどの制作物とドキュメントは、車の両輪の関係といえる。本書はプログラミングにおけるテストコードのように文章の誤りを検出するRedPenやパージョン管理システム(GitHub)などを用いることで、ソフトウェア技法に基づいた品質の高いドキュメント作成を目指す。技術評論社 二四八〇円

考えながら書く人のための

Scrivener入門

向井領治著 Scrivener は文書作成ソフトウェアの一種。動画やWebページなど異なる形式の資料を一元管理できるなど多彩な機能を持ち、小説やレポートといった長文の作成に適している。巻頭のユーザーインタビューは『Gene Mapper』（ハヤカワ文庫・七〇〇円）のSF作家、藤井大洋氏。執筆作業の大半をScrivenerでおこなっているという藤井氏がどのように活用しているかを知ることができる。ビー・エヌ・エヌ新社 二五〇〇円

今月の
おすすめ

自然科学

叢

小田康平の多肉植物

小田康平著

「多肉植物の写真集」をご紹介したい。ただしちょっと珍しい、いや、きつとほとんどの方が見たことのないような植物ばかり。トゲトゲ、もじゃもじゃ、ウネウネ……言葉では上手く表現できない。どのページの植物も、一般的なイメージからすると「納得いかない」姿をしているのである。著者は広島にある植物屋の店主。「叢—Qusamura」は、「いい顔してる植物」をコンセプトに独自の美しさを提案する多肉植物専門店である。

サボテンを含む多肉植物は、ゆつくり時間をかけて大きくなる。成長期には、そのへんてこな名前や姿からは想像もつかない美しい花を咲かせる。かと思えば、その花はたった一日で枯れてしまうこともある。人間の生き様も同じようなものではないかと思う。著者が植物監修

として山崎ナオコラ氏とコラボした小説『ボーイミーツガールの極端なもの』（イースト・プレス・一六〇〇円）も併せておすすめしたい。

現代企画室

二五〇〇円

理系のネタ全書

話題の達人倶楽部編

周囲の人間から勉強ができると思われているものの、実際はそこまでできが良いわけではない。ふとした疑問をもった友人、知人、家族から浴びせられる「これはなんでこうなるの？（あなた頭が良いでしょ?）」という質問のたびに机の下でスマホ片手に必死に答えをググる、本書はそんな苦労から開放される救いの書である。

最新の科学ニュースを正しく読むコツから、子どもに聞かれても困らない理科雑学までカバーした、まさにネタ全書。解説文も非常に簡潔で、どれだけ長くても一ページあるかないか程度。扱うネタによつては図解も載っており、具体的なイメージをしつつスラスラ知識を吸収することができる。

最小の努力で最大の効果を発揮できる

本書で、周囲から投げかけられる質問にも颯爽と答えることができるはず。理系デビューにも使えるお得な一冊。

青春出版社

一〇〇〇円

潜水艦のメカニズム

完全ガイド

佐野 正著

艦これファンや軍事マニアには期待はずれだろう一冊。兵器軍備としての潜水艦ではなく「過酷な環境下で動くことを前提として開発された乗り物」である潜水艦について書かれた本である。

潜水艦は海中を隠密裏に長時間移動する性格上、潮流耐圧防食などはもちろんのこと、居住性や高機動性の保持などクリア必須の問題が山積み。その設計からメンテナンスまでどのような技術が用いられているのか、元川崎重工の潜水艦設計部長である著者によつて文系の素人にもわかるよう平易に解説されている。数多の最先端技術が俯瞰で登場するので、工学系を志す人にはなおさら面白く読めるだろう。

秀和システム

一八〇〇円

今月の
おすすめ

医学書

西 智弘著 患者や家族の思い・考えが大切になる緩和ケア。緩和ケアはすべ

てのがん診療に携わる医師が身につけるべき考え方・技術であるが、答えが出にくい（決まった答えがない）領域に直面するケースもあり、日常臨床の現場で必ず「壁」にぶつかる。本書は、「余命告知」「身体拘束」などの様々なエピソードをケースファイル・ケーススタディで紹介し、乗り越えるための視点や方法を考える。患者の幸せを守り、その人らしく最後まで生きて人生を全うできるように支える医療のあり方、医師の役割を問う。

中外医学社 二六〇〇円

解体新書〔復刻版〕

西村書店編集部編

一九一六年創業の医学書出版社・西村書店の一〇〇周年記念出版としてあの『解体新書』が完全復刻された。著者と

して一般的に杉田玄白が有名だが、主として翻訳に携わった前野良沢や中川淳庵、公表にあたって幕府への了解を得ることに尽力した桂川甫周、付図を描いた画家・小田野直武など、様々な人々が鎖国下の日本でそれまでになかった翻訳本の出版に奔走している。誤訳が多いとの評価もあるが、当時知られていなかった概念や言葉を苦心惨憺の末に訳出したであろう事はその行間から滲み出るようであり、何よりその後つながる日本の近代医学を切り開いたかけがえのない書として今もその魅力は色褪せない。

西村書店 三〇〇〇円



メッセンジャーナース

看護の本質に迫る

村松静子監修

甲州 優・武田美和・川口奏子編
今、急性期病院は在院日数の短縮に伴い医療者から十分な説明を行う時間は少なく、また患者やその家族は不安や不満がありながらも受け入れている状況である。この両者の想いを汲み取るべく二〇一〇年十月メッセンジャーナースが誕生した。

メッセンジャーナースとは、患者やそのご家族との対話を重視し、医療関係者と医療の受け手をつなぐ懸け橋となる看護師のことを指す。今後、看護師の得意分野の力量を発揮出来るようなシステムの構築や地域の特性を生かした病院・施設の再編成にメッセンジャーナースとして参加していくことで、地域づくりの支援につながっていくのではないだろうか。

看護の科学社 一五〇〇円

臨床研究の教科書

川村 孝著

前著書『エビデンスをつくる』（医学書院・二八〇〇円）よりも、複雑な疫学や統計学などを初学者向けにわかりやすく書かれた本。

医学書院 四二〇〇円

今月の
おすすめ

社会科学

Who Gets What

アルビン・E・ロス著

著者はスタンフォード大学教授で一九五一年生まれ。専攻はゲーム理論やマーケットデザインなどで、二〇一二年にはロイド・シャープレーとともにノーベル経済学賞を受賞している。本書は著者の研究成果であるマーケットデザインやマッチメイキングなどを、臓器移植やマッチングや学校選択など様々なエピソードを通じて解説をしていく。いわゆる経済学のテキストの体裁ではなく、数式は登場しない。エピソードを追いつながら概念を理解していくという形である。

日本経済新聞出版社 二〇〇〇円

地球を「売り物」にする人たち

マッケンジー・ファンク著

著者は若手のジャーナリストで、気候変動とそこから起こる現象を利用して儲けようとしている人々取材している。

六年の歳月をかけた取材は十二章に及ぶ。温暖化でグリーンランドとカナダの間の北西航路の水が解けることで天然資源の採掘や航行をめぐる問題に発展し、アメリカ、ロシア、デンマーク、カナダによる争奪戦になっているという。訳者あながきでもふれられているが、解決策や提案は示されておらず、読者に警鐘を鳴らし、判断を仰いでいるようである。

ダイヤモンド社 二〇〇〇円



ドキュメント 世界の傭兵最前線

アル・J・フェンター著

本書は、世界初の民間軍事会社（PM C）、南アフリカのエグゼクティヴ・アウトカムズ社と周辺の関係者を中心にした傭兵活動を紹介した一冊である。著者は国際的に活躍する戦争ジャーナリス

ト。イラクの雇われ兵や、南レバノンのアメリカ人兵士、ローデシアで反政府軍兵士を捕まえる賞金稼ぎなど、様々な傭兵たちが登場する。写真の掲載や使用武器の情報も多く、読み応えがある。国際社会が紛争を解決できない今、傭兵の役割はさらに拡大すると予想される。

原書房 二八〇〇円

少子化は止められるか？

阿部正浩編著 少子化が進むと、労働

力や社会保障の財源が不足する。多方面で問題が起こるのだが、国・自治体・企業はこの流れを反転させるためどんな手を打ってきたのか。経済学の研究者たちがその対策ごとに分析した。これまで数多くの政策があり、各々一定の効果はあったのに、残念ながら全体としての解決には至っていない。本の終盤に今後のあり方にまで言及しているが、とにかく課題の多さが気にかかる。

有斐閣 二〇〇〇円

老後親子破産

NHKスペシャル取材班著

本書は大反響のNHKスペシャル「シ

リーズ 老人漂流社会」、その第四弾の書籍化。

日本の超高齢化社会の最前線をとらあげた内容で、誰もが他人事ではいられない恐ろしい現実が書かれている。前回は独居老人の貧困問題だったが、今回は、家族がいても生活が苦しい、家族の存在が実は却って裏目に出てしまう、というケースを掘り下げて取材している。介護や病氣、非正規雇用、ひきこもり、生活保護制度の限界など、様々な負の連鎖で、親子共倒れとなる過程が報告されている。札幌地区での事例が中心だが、同様の一家破綻危機は、全国で今まさに進行中だと感じさせられた。

講談社

一三〇〇円

ストーカー加害者

田淵俊彦著

なぜ人は、ある日突然ストーカーになつてしまふのか。本書はNNNDキュメントディレクターが、ストーカー加害者たちの心の闇に迫った一冊。

ストーカーと一口に言っても、取材の中で執着型や求愛型、一方型といくつかのタイプに分かれる。自分が相手を一

大事にしていると思う者もいれば、愛情を確かめるために暴走する者もいる。こうした犯罪背景には、人間関係の希薄化や、先行きのみえない経済的不安などの社会問題があり、それこそが彼らのストーカー心理と深く関わることが指摘されている。

河出書房新社

一四〇〇円



中国第二の大陸アフリカ

ハワード・W・フレンチ著

地球最後の巨大市場、アフリカ。中国は官民ともにアフリカ進出に熱心で、既に百万人の中国人が移住してビジネスを展開している。アメリカの新聞記者だった著者はアフリカ各地をまわり、働く中国人の素顔を取材。彼らは母国には不満を抱いているが、新天地には自由と

チャンスを感じている。この十数年で各国の経済発展に大きく貢献した中国移民だが、現地ではチャイナパワーによる植民地化を危惧する声も最近聞かれるようになってきた。資源の搾取も進行し、アフリカは今、転換期を迎えつつある。

白水社

二二〇〇円

スーパードボス

シドニー・フィンケルシュタイン著

優れた業績を残しながら、後継者を育てられず失速していく企業は多い。しかし、自身も優れた業績をあげながら、優秀な人材を多数輩出する人もいる。

本書では名経営者の他、マイルス・デイベイスやアリス・ウォーターズなど、様々な業界で人材を育て、業界に影響を与えてきた人々スーパードボスを調査分析。性格も背景もばらばらの彼らが共通してとる行動や戦略、通常のよいマネジャーとの相違点を明らかにする。最終章ではスーパードボスになる／みつける／その下で成功するための実践論まで落とし込んであり、実用性も十分。千万無量のリーダーシップ論の中でも読むに値する一冊だろう。 日経BP社 一八〇〇円

今月の
おすすめ

人文科学

都市に刻む軌跡

田中研之輔著

街中で、たまに見かける「スケートボード禁止」の看板や、スケートボーダーらしき若者たちの集団。その集団に属していない者にとってはその世界の構造がどうなっているのか知る由もない。本書はそんなスケートボーダーたちの世界を描いたエスノグラフィである。誰に強要されるでもなく、彼らがスケートボードに没頭する背景、意味とは？ 調査に十七年を費やした著者渾身の一冊。

新曜社

三二〇〇円



大山猫の物語

クロード・レヴィーストローズ著

『神話論理』に連なる「小神話論理」三冊の最終巻として出されたレヴィーストローズの神話研究の到達点。双子のようには似ていた大山猫とコヨーテはある日諍いを起こして、コヨーテは相手の鼻面を押し縮め、大山猫は相手の鼻面を引き伸ばして、お互いに今の姿になったという。南北アメリカ先住民神話に表れるこの「双子であることの不可能性」を通して、西洋古代神話との対比を浮かび上げ、新世界における「自己と他者」についての重要な視点を提起する。

みず書房

五四〇〇円

空海の座標 存在とコトバの深秘学

高木神元著

高野山大学名誉教授であり、インド古代思想から日本仏教まで広く研究をしてきた著者による本書。空海存在論の核心となるマンダラ思想について、空海の生きた時代、著作とともにその思想の生成の過程をたどる。時に難解で神秘的な印象を持たせる空海思想に迫る一冊。

慶應義塾大学出版会

二八〇〇円

〈こころ〉はどこから来て、どこへ行くのか

河合俊雄ほか著

本書は「京都こころ会議」における五つの講演と、最後のデイスカッションの要約からなる。講演者は河合俊雄、中沢新一、広井良典、下條信輔、山極寿一と多彩かつ豪華。まずはデイスカッションに軽く目を通していただきたい。「リンゴの唄」、LINE、フィボナッチ数と話題が次々とんで楽しい。

岩波書店

二一〇〇円

茶色のシマウマ、世界を変える

石川拓治著

日本初の全寮制インターナショナル高校を、しかも教育基本法上の正式な学校として設立するという前代未聞の偉業を成し遂げた小林りんの物語。生徒は世界中から募集し、奨学金全額支給の生徒もいる。授業はアクティブな学びや、グローバル教育の理想を先取りしている。

「本物のリーダー」を育てたいという使命感から生まれた感動のドキュメント。

ダイヤモンド社

一六〇〇円

今月の
おすすめ

文学・文芸

ツバキ文具店

小川 糸 著

鎌倉で文具店兼代筆業の「ツバキ文具店」を営む雨宮鳩子のもとには、今日も一風変わった不思議な依頼がやって来る。ペットのお悔やみ状からお金の無心への謝絶状、亡くなった夫から妻へのラブレター等々……。

様々な事情を抱えた依頼人になり代わり、言動の裏にもった思いを汲みとりながら、今日も日々奮闘する鳩子。そしてそんな彼女の日常を彩るちょっぴり変わった友人・知人たち。

古都鎌倉の四季折々の美しい景色・風景を背景に、手紙に込められた人々の様々な思いが交錯する、ちょっぴり笑えて、ほろりと泣ける素敵な物語。

本書を読んだ後は、きつと誰かに手紙で思いをつたえたくなるはず。

幻冬舎

一四〇〇円

マチネの終わりに

平野啓一郎 著

お恥ずかしい話なのだが、実は私、芥川賞受賞作『日蝕』はおろか、その他の作品も難解なため、何度となく挫折した。でも本作は、気が付けば最後のページ。良い小説に出会えた喜びに、思わずありがとう／＼と本を握りしめた。

恋愛小説と聞いていたが、それだけじゃない、もっと深い人生ドラマを感じた。

「人は、変えられるのは未来だけだと思ひ込んでいる。だけど、実際は、未来は常に過去を変えてるんです。変えられとも言えるし、変わってしまうとも言える。過去は、それくらい繊細で、感じやすいもの」

この文章を読んだ時、思わずハッとした。他にも何度ハツとしたことか。あとはクラシックに精通していれば、もっと楽しめるのかも？

毎日新聞出版

一七〇〇円

ハーレーじじいの背中

坂井希久子 著

笑いあり、涙ありの家族小説である。

主人公の真理奈は高校三年生。両親とじじばば（二組）と老犬の七人家族。何不自由なく暮らしてきたけれど、大学受験を前に将来への不安に苛まれていた。

そんな時、ひよんなことから風来坊の祖父・晴じいと旅に出ることになる。それはまさしく現実逃避であったのだが、二人にとって自分と家族を見つめ直すよい機会となる……。

ケンカをしながら、他人とまじわりながら、一緒に生きること確かめあっている様が清々しくユーモアたっぷり描かれている。真理奈は自分がどれだけ愛され、守られてきたのかを実感し、ひとりでは生きてゆけないこと、助け合い、互いを想いやることの大切さを理解するのである。そう、これから強く生きていけるであろう勇気を晴じいにもらったのだ。

ラスト、彼女の少し大人になった姿にホロツときた。もう、心配しなくていいよね。

双葉社

一五〇〇円

今月の
おすすめ

文庫・新書

マツリカ・マジヨルカ

相沢沙呼著

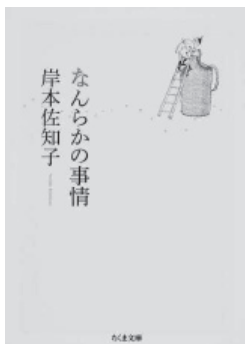
高校一年生の柴山祐希は、クラスに馴染むことが出来ずに鬱屈した日々を送っていた。そんなある日、祐希は、学校の近くにある廃墟ビルに人影を見つける。窓から身を乗り出すその姿に、自殺するつもりかもしれないと感じた祐希は、自殺を止めようと廃墟に足を踏み入れる。しかしそこに待ち受けていたのは、マツリカと名乗る、美しくも傲岸不遜な、一人の不思議な少女だった。

「西乃初の事件簿」シリーズの著者・相沢沙呼が贈る、クラスに居場所がない少年と、廃墟に棲みつく少女の物語。ヘタレ男子と謎を持つ少女という構図は、「西乃初の事件簿」シリーズでもおなじみである。しかしその度合にはかなりの差があり、今作における両者の立ち位置は、女王様と犬。パシリとなった祐希は「柴犬」呼ばわりされながらも、マツリ

カに命じられるままに動き、彼女の興味の対象である「怪談」について調べていく。そうして集められた情報を元にマツリカが導き出す答えはどこか物悲しく、真相を告げられた祐希は、少しずつ自分自身と向き合っていく。

角川文庫

六四〇円



なんらかの事情

岸本佐知子著

翻訳家の書いた本と聞くと、外国語の学習に役に立つことが書いてあったりするのかな？とうっかり思ったりするが、もちろん、この本は英語学習の役には立たない。日常エッセイのようであり、しかしSF小説のようでもあり、何と分類していいか迷ってしまう世界が広がっている。

しかし、脳の普段使っていないところを心地よく刺激されて、読む前と読んだ後ではきつと世界が違って見えるはず。

ちくま文庫

六〇〇円

トウガラシの世界史

山本紀夫著

日本では今や一番作られている漬物がキムチになったとはいえ、シヨウガやニンニクに比べると、あまり派手にスポーツトライトを浴びることのないトウガラシ。しかしながら、コロンプスがカリブ海や西インド諸島からヨーロッパにトウガラシを持ち帰ってから世界各地に広まり、今やさまざまな形で食されている。

メインに躍り出る食材ではないかもしれないが、食卓に革命が起こったと言える地域もあった。トウガラシはどのような生まれ、広がったのか。食文化にもたらした役割と魅力を伝える一冊。

アンデスの多様な野生トウガラシ、インドのカレー、四川の豆板醤、朝鮮半島のキムチ、日本の京野菜などなど、地域別の記述がわかりやすく、興味あるところから読んでいける。

中公新書

八六〇円

今月の
おすすめ

芸術

猿の眼 僕ノ愛スル器タチ

市川猿之助著

二〇一五年、人気漫画『ONE PIECE』が歌舞伎になるらしいというニュースを初めて聞いた時には、度肝を抜かれた。その名も「スーパー歌舞伎Ⅱワンピース」、手掛けたのは市川猿之助である。古典だけではなく新作歌舞伎にも意欲的に取り組む彼が、歌舞伎以外に情熱を注ぐものがあるのをご存じだろうか。それが本書で語られる「骨董蒐集」という趣味である。

一つ一つの骨董との出会い、その時々演じていた役とも奇妙に繋がり、一章ごとに様々な物語を作り出す。面白いのは器によってもたらされる人々との出会い。器のもつ力なのか、市川猿之助という人の持つ力なのか、きつと両方が相まって奇跡的な出会いを生むのだろう。

淡交社

二〇〇〇円

若冲 その尽きせぬ魅力

狩野博幸監修

今年生誕三〇〇年を迎える絵師・伊藤若冲。

十年という歳月をかけて描かれた全三十幅の「動植綵絵」や、樹目描きの手法で描かれた「鳥獸花木図屏風」などはあまりにも有名である。

今にも動き出すのではないか、と思うほど躍動感に溢れた動物たち。その煌びやかな色彩も、思わず目を奪われるほどだ。はたまた、モノクロームが美しい版画作品など、様々な絵画を描いた若冲の魅力が詰まった書籍である。

二〇一六年五月二十四日(火)まで東京都美術館でも展覧会が開催されているので、既に観に行った方にも、これから観に行く方にも是非オススメしたい。

『若冲ワンダフルワールド』(新潮社とんぼの本・一六〇〇円) 『若冲原寸美術館100%Jakucho』(小学館・三〇〇〇円) 『若冲への招待』(朝日新聞出版・一六〇〇円) など、関連書も続々刊行されているので、併せてご確認ください。

CCCメディアハウス 一八〇〇円

東京JAZZ地図

交通新聞社編

ジャズが誕生して一〇〇年余り。今なお多くの人々に愛され、進化を続ける音楽であるジャズと、東京で直接触れ合うことができるスポットを紹介したものが本書である。

老舗のジャズ喫茶から新装開店、リニューアルオープンのお店や生演奏を聴くことのできるライブハウスなどなど、実に八十軒近くのお店が紹介されている。

それぞれのお店の特徴や、辿った歴史についても書かれているので、なんだか紙面からジャズが聴こえてくるかのように感じることが出来る。

近くにお越しの際は、一度足を運んでみてはいかがでしょうか。

交通新聞社

二二〇〇円



**今月の
おすすめ**
実用書
地図・旅行書

『ポケット版』
「暮しの手帖」とわたし

大橋鎮子^{しずこ}著

四月から始まった、NHKの新しい朝ドラ「とと姉ちゃん」。毎朝、今日はどんなドラマが繰り広げられるかと楽しみにしている方も多いはず。著者の大橋鎮子さんは「とと姉ちゃん」のモデルとなった女性で、彼女の唯一の自伝が本書。

ドラマをご覧になっていらっしゃる方ももちろん、ご覧になっていない方でも、落ち着きのある親しげな語り口に魅了されるのではないだろうか。激動の時代を駆け抜け、戦後の暮しに灯をともし続けた一人の女性の物語である。

暮しの手帖社

九〇〇円

朝食ビスケットとコーンブレッド

原亜樹子^{あきこ}著

ビスケットと言っても、本書で取り上げられているのは「クッキー」とどう違うの? という、あの薄く

て甘いお菓子ではない。ケンタッキーフライドチキンで売っているあれ、と言えばお分かりいただけるだろうか。アメリカ南部のソウルフードとも呼ばれる、無発酵パンのことである。

一方コーンブレッドは、コーンミールと重曹を使った、やはり無発酵パン。こちらは「大草原の小さな家」に出てくる「とうもろこしパン」、カポテーの短編に「まともな食べ物」としてよく出てくるものだ。

と、文章で書くよりも、とにかく実際に見ていただきたい。ふんわりサクサクおいしそうな写真の数々。おうちで作るパンにチャレンジしたいけど、ちよつと難しそう、と二の足を踏んでいる方にもおすすめだ。

グラフィック社

一六〇〇円



英国一家、

インドで危機一髪

マイケル・ブーヌ著 寺西のぶ子訳

アニメ化もされた『英国一家』、『日本を食べる』の第三弾。今回はぐっと目先を変えて、行き先はなんとインド。しかも帯には、「今回は、食べ歩きはしないの、家族のために。」とある。

「なん? どうしたの? なになに、家を担保に借金をして生活費を補ってきた(ノ)けれど、世界的な経済危機の余波で郊外に移住せざるを得ず、偏愛するレストランやワインショップやデリカッセンから遠く遠く離れてしまった。そしてご本人は認めていないけれど、アルコール依存症とうつ病の疑いがある、と。そんな夫を見るに見かねて、「このままでは、うちの家族はもう長くは持たないわ」と一念発起した奥さまが、八歳と六歳の子ども達を連れて三ヶ月の家族旅行を企画したんですって!

旅行好き、食道楽なあなたはもちろん、中年という年齢に苛立ちと焦りを感じる方にもきつとスッキリ笑っていただけ、軽快かつ愉快な一冊。

KADOKAWA

一八〇〇円



語学・辞典

悪あがき英会話

松本ぶりつつ著

海外旅行で全く英語が話せなかった著者は、夫婦で英会話教室に通うことを決意する。「いやよ日本語しゃべればもう」とやさぐれたり、漫才のようなロールプレイを展開したりと、教室通いの日々が面白おかしく描かれている。

各エピソードの間には「アラフォーに効くノ 英語のツボ」として、専門家によるアドバイスも載っている。各話にちなんだコラムであるため、興味を持って知識を身につけることも可能である。

自ら通うことを決意したのに、イヤイヤ通っていると言ってはばからない著者。しかし、覚えた英会話で会話が成り立った時の感動を糧に、レッスンをちよつとした冒険として楽しんでいるのだという。その後ろ向きだけど前向きな姿勢とエピソードにクスリとさせられる。

KADOKAWA

一〇〇〇円

英語のスピーキングが驚くほど上達する
NOBU式トレーニング

山田暢彦著

英語を話すためには下地であるインプットが必要だ。人が言葉を習得するのはインプット→アウトプットの順番が原則と言われている。ただ闇雲にアウトプットだけしていても、発信力を支える下地のインプットがなければ、言葉は出てこない。

本書のトレーニングは、まずインプットのための英文を読んだ後、日本語を英語に訳すという、とてもシンプルなものだ。レベルは中学一年レベルからなので、まずは易しい例文で始め、徐々に複雑な例文へと進んでいく。巻末の「日本人がつまずきやすい英文法」では、英文法の基本事項と前置詞のコア・イメージなどがまとめられており、読むだけで文法が苦手項目が少なくなるだろう。

また、出版社ホームページにNOBU先生の生講義動画もあり、これを観てトレーニング方法を直接聞くことにより、効果が更に高まるだろう。

IBCパブリッシング 一六〇〇円

徹底比較
日本語文法と英文法

皇山雄二編

日本語と英語の比較文法の本の中でも万人にお勧めできる本格的な入門書だ。一つの項目の説明が見開き二ページで完結しており、左ページに日本語の説明、右ページに英語の説明と分かれているので読み易い。見開きの右上には各項目のまとめが載っており、短時間で復習することも可能だ。

さらに本書は今まで触れられなかったような興味深いことにも踏み込んでいる。例えば日本語には「ゲグる」や「パクる」など名詞が動詞化した言葉があるが、英語にも「bottle」や「bug」など名詞を動詞として使うものがある。こうした名詞の動詞化が起こる時日本語でも英語でも、ある二つの要素が意味と形を決定しているという説明にははっとさせられた。ある二つが何かはぜひ本書を見ていただきたい。

章ごとにおすすめの本と論文も載っており、より深い勉強へも進み易い。あらゆるレベルの人におすすめできる一冊だ。

くろしお出版

一八〇〇円

今月の
おすすめ

児童書

あつたかいな

くすのきしげのり作

片山 健絵

ねこのミーちゃん、もうすぐあかちゃんをうみます。必死に頑張り出産するその母、この姿とあたらしい命にふれた二人のおんなのこは、じぶんのおかあさんのことを思い、そして生まれてきた命の尊さや温もりを全身で受け止めます。

廣済堂あかつき

一六〇〇円

おはなをあげる

ジヨナルノ・ローソン作

シドニー・スミス絵

誰にも気づかれずそつと道端の花を摘み、通りすがりにプレゼントをしてゆく少女。モノクロだった彼女の世界は、静かに、少しずつ色鮮やかに輝き始めます。小さな優しさと幸せを絵だけで表現した文字のない絵本です。

ポプラ社

一四〇〇円

水はみどろの宮

石牟礼道子作 山福朱実画

渡し守の物知りなじい様に大切に育てられたお葉の日常は不思議に満ちています。山の女神のお使い犬らん、千年狐の^ヌごんの守、片目の猫おノンの黒御前、自分を包む山の神秘をその柔らかな心に溶け込ませていきます。すべてが音に満ちた美しい物語です。

福音館文庫

七〇〇円



エベレスト・ファイル

シエルパたちの山

マット・ディキンソン作

原田 勝訳

山が人を呼ぶのか、エベレスト登山隊に参加しその後行方が分からなくなったシエルパ族の少年カミ。少年の幼馴染に頼まれて行方を突き止めた主人公は、カ

ミからエベレスト登山隊で起きた真実を打ち明けられます。その頂に立つことを夢みて、時には人生すら変えてしまうほどの抗いがたい魅力を持つ世界の最高峰。孤高の存在に魅せられた人々の物語です。

小学館

一五〇〇円

絵本に魅せられて

佐藤英和著 こぐま社を創業した佐藤英和氏のこれまでの講演などをまとめた本が、こぐま社創立五十周年を迎えた今年、出版されました。佐藤氏の児童書編集者としての思いが詰まっているのみならず、日本の児童書の礎を築いた編集者、岩波書店のいぬいとみこ氏・石井桃子氏、至光社の武市八十雄氏、福音館書店の松居直氏など先達の思い、東京子ども図書館の松岡享子氏や作家との対談など、貴重な一冊になっています。ロングセラーになって今も読み継がれている児童書がこんな思いをもって作られ、それを手渡す図書館・文庫・書店があることに感極まるものがあります。絵本と子どもの心と言葉の関係の捉え方が継承されて欲しいと思います。

こぐま社

一八〇〇円

『長いお別れ』を読んで

中尾 智子

後期高齢者と呼ばれる年齢となつて、つい手に取るのは高齢者を扱った本が多くなつた。小説・エッセー・ノンフィクションと実に多く出版されている。本を読む人も高齢者が多くなつたからなのか。

中島京子の本を読みたいと思つたのはまずタイトルに魅かれた。主人公は妻により行動の変化に気付かれて、「もの忘れ外来」を受診し治療（投薬）を始めるが、徐々に認知症が進行する。その間の本人と家族（主に妻）・介護師やケアセンターの有様がまさに経験している様に現実味を帯びて描かれている。子供三人はすでに自立し、二人は家庭があり、三女は仕事で、めつたに実家集まることもない。妻が一人奮闘してデイサービス・訪問介護を受けながら自宅で介護を続けている。しかし、その妻が入院することになったとき、夫をどうするか、たとえ妻を識別出来なくなつていてもいつ

もそばにいる人を見かけないと不安で落ち着かない。娘達がとも角もかけつけたものの、一日でへとへとになる。教育者としてあれ程威厳のあつた父がまるで子供に帰っている。そうして徐々に遠くの方に行つてしまふ。誰にでも起こりうる現実。認知症でなくても、介護といふことがいかに大変なことか、デイサービス・訪問介護と支援はあるとはいへ、四六時中見守つている者の負担はいかほどのものか。作者の介護される者・介護する者への眼差しが温かく、読後暗い思いをせずすむ。

（七十五歳）

*『長いお別れ』（文藝春秋・中島京子著・一五五〇円）

ATION

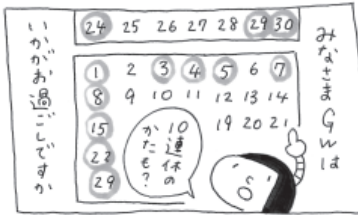
<p>ジュンク堂書店 ＝名古屋栄店＝ ☎(052)212-5360 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝名古屋セントラルパーク店＝ ☎(052)971-1231 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ロフト名古屋店＝ ☎(052)249-5592 [営業時間] 10時半～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝名古屋店＝ ☎(052)589-6321 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN ＝岐阜店＝ ☎(058)297-7008 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN ＝四日市店＝ ☎(059)359-2340 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝滋賀草津店＝ ☎(077)569-5553 [営業時間] 10時～22時</p> <p>MARUZEN ＝京都本店＝ ☎(075)253-1599 [営業時間] 11時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝京都店＝ ☎(075)252-0101 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝奈良店＝ ☎(0742)30-1021 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝梅田店＝ ☎(06)6292-7383 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝関西国際空港店＝ ☎(072)456-6486 [営業時間] 7時～21時半</p> <p>丸善 ＝八尾アリオ店＝ ☎(072)990-0291 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝高島屋大阪店＝ ☎(06)6630-6465 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大阪本店＝ ☎(06)4799-1090 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝難波店＝ ☎(06)4396-4771 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝天満橋店＝ ☎(06)6920-3730 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝上本町店＝ ☎(06)6771-1005 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝梅田ヒルトンプラザ店＝ ☎(06)6343-8444 [営業時間] 11時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝近鉄あべのハルカス店＝ ☎(06)6626-2151 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝高槻店＝ ☎(072)686-5300 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮店＝ ☎(078)392-1001 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝西宮店＝ ☎(0798)68-6300 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸住吉店＝ ☎(078)854-5551 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝芦屋店＝ ☎(0797)31-7440 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝三宮駅前店＝ ☎(078)252-0777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝姫路店＝ ☎(079)221-8280 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝舞子店＝ ☎(078)787-1250 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝神戸さんちか店＝ ☎(078)335-2877 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝岡山シンフォニービル店＝ ☎(086)233-4640 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN ＝広島店＝ ☎(082)504-6210 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝広島駅前店＝ ☎(082)568-3000 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝高松店＝ ☎(087)832-0170 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝松山店＝ ☎(089)915-0075 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN ＝博多店＝ ☎(092)413-5401 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝福岡店＝ ☎(092)738-3322 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝大分店＝ ☎(097)536-8181 [営業時間] 10時～20時</p> <p>MARUZEN ＝天文館店＝ ☎(099)239-1221 [営業時間] 10時～20時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝鹿児島店＝ ☎(099)216-8838 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝那覇店＝ ☎(098)860-7175 [営業時間] 10時～22時</p>
---	---	--	--

<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 札幌店 ＝ ☎(011)223-1911 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 水戸京成店 ＝ ☎(029)302-5071 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 日本橋店 ＝ ☎(03)6214-2001 [営業時間] 9時半～20時半</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 吉祥寺店 ＝ ☎(0422)28-5333 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>MARUZEN ＝ 札幌北一条店 ＝ ☎(011)232-0222 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN ＝ 丸広百貨店飯能店 ＝ ☎(042)973-1111 [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善 ＝ お茶の水店 ＝ ☎(03)3295-5581 [営業時間] 月～金10時～20時半 土10時～20時 日・祝10時～19時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 立川高島屋店 ＝ ☎(042)512-9910 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 旭川店 ＝ ☎(0166)26-1120 [営業時間] 10時～19時半</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 大宮高島屋店 ＝ ☎(048)640-3111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN ＝ 多摩センター店 ＝ ☎(042)355-3220 [営業時間] 10時半～21時</p>	<p>丸善 ＝ ラゾーナ川崎店 ＝ ☎(044)520-1869 [営業時間] 10時～22時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 弘前中三店 ＝ ☎(0172)34-3131 [営業時間] 午前10時～ 午後7時</p>	<p>丸善 ＝ 桶川店 ＝ ☎(048)789-0011 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 有明ワンザ店 ＝ ☎(03)5530-5701 [営業時間] 10時～19時半</p>	<p>丸善 ＝ 横浜ポルタ店 ＝ ☎(045)453-6811 [営業時間] 10時～22時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 盛岡店 ＝ ☎(019)601-6161 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 津田沼店 ＝ ☎(047)470-8311 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ メトロ・エム後楽園店 ＝ ☎(03)5684-5130 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 藤沢店 ＝ ☎(0466)52-1211 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>丸善 ＝ 仙台アエル店 ＝ ☎(022)264-0151 [営業時間] 10時～21時 日・祝10時～20時</p>	<p>丸善 ＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝ ☎(047)305-5808 [営業時間] 11時～21時、 土・日・祝10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 新宿京王店 ＝ ☎(03)5321-4685 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 新潟店 ＝ ☎(025)374-4411 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 仙台TR店 ＝ ☎(022)265-5656 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 松戸伊勢丹店 ＝ ☎(047)308-5111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 池袋本店 ＝ ☎(03)5956-6111 [営業時間] 月～土10時～23時 日・祝10時～22時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 岡島甲府店 ＝ ☎(055)231-0606 [営業時間] 10時～19時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 秋田店 ＝ ☎(018)884-1370 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 渋谷店 ＝ ☎(03)5456-2111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ プレスセンター店 ＝ ☎(03)3502-2600 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN ＝ 松本店 ＝ ☎(0263)31-8171 [営業時間] 10時～20時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 郡山店 ＝ ☎(024)927-0440 [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善 ＝ 丸の内本店 ＝ ☎(03)5288-8881 [営業時間] 9時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 大泉学園店 ＝ ☎(03)5947-3955 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 新静岡店 ＝ ☎(054)275-2777 [営業時間] 10時～21時</p>
			<p>丸善 ＝ 名古屋本店 ＝ ☎(052)238-0320 [営業時間] 10時～21時</p>

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。

定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

ブックブレスター



誌上で各店のおすすめフェ
アを紹介するページは、今月
はM&J札幌店。えぞホネ団
Sapporoさんとのコラ
ボ企画「ホネライフフェアだ。
「えぞホネ団」で検索すると
フェイスブックを見ることが
できて、これがまた興味深く
て面白い。(緒)

<https://www.facebook.com/>

[ezone/](https://www.facebook.com/ezone/)

投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字×六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承ください。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五五一

丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係

TEL〇三―五九五六―六一一

いつも「書標」をご愛読いただきまして
ありがとうございます。本誌定期購読料は
以下の通りです。

定期購読料 年間二二〇〇円(送料込)

現金書留もしくは八十二円切手十五枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五五一

丸善ジュンク堂書店特急係

TEL〇三―五九五六―六一二〇

FAX〇三―五九五六―六一〇〇



QRコード

PC・スマートフォンから
<http://www.junkudo.co.jp/>



悪童日記 (♂♀版)

本屋のうらばなしというより僕のうらばなしなのだが、我が家の双子(♂♀)も二歳半。傍若無人ぶりに磨きがかり、ますます目が離せない。

それもあって僕と奥さんは出来るだけ保育園の休みと重なるように休んでおり、休日は「家族全員集合!」状態である。僕一人の休日なら、午前中から缶チューハイ、パソコンいじって眠くなったら寝る、というダメな大人の休日を過ごしたいところだが、それも行かない。というか、休日どころへも行かず彼らを家の中に閉じ込めておくのは不憫に思えて、とにかく外へ連れまわすようにしている。先日どこに連れて行くか……と考えていたら、ふとあることに思い当

たった。おそらく僕の両親も、この「子どもをどこかへ連れていかねば!」感を休みのたびに感じていたのだろうなあ、と想起したのだ。

僕が午前中からお菓子とファミコン、眠くなったら寝る、というダメな子どもの休日を過ごしたいと思っても、両親に山やら海やら街中やらと連れまわされたものだ。当時は「めんどくせえな」と思っていたが、今では感謝している。しかしそんな両親でも全く連れていってくれなかった所がある。「本屋」だ。父と母が雑誌以外の本を読んでいた記憶はない。活字に縁遠かったのだろう。対してうちの奥さんは奇しくも元某大型書店員。僕ともども自然と書店に足が向く。しかし我が子らにとつてまだまだ書店は「暴れる場所」だ。走り回っては人につかり、「顔がパンのあのヒーロー」の本の山を崩し、笑顔で「ウンチ出たっ!」と教えてくれたりする。

さて、僕は自力で本を読む大人になったが、今後彼らはどうなるだろうか。いや、別に本を読まない人間に育つても全然かまわない。たぶん世界には読書より有益で楽しいことが山ほどあるだろう。でも、もし彼らが本を読むようになり、「これ面白いから読んでみなよ」と薦められたら……ここで「感動! 号泣!」なんて書くと収まりが良いのだろうが、僕は人から本を薦められるのがどうにも苦手なのだ。それは家族であつても変わらず、想像するとむず痒くてダメ。ごめん。ところで、アメリカの偉い学者さんによると、小規模書店はあと二十年、大型チェーン書店でも四十年で「世界から」無くなるそう。嘘か真か、今は知る由もないが、本を好きで読むようになった我が子らに「その昔、本屋」という物があつてな……」なんて言うのは寂しいので、今のうちに頑張らなくては、と思う。

(丸北サト)

「書標 ほんのしるべ」 第45号

編集・発行人 工藤 恭孝

発行所 (株)丸善ジュンク堂書店

印刷所 (株)七 旺 社

〒160-0008

〒653-0013

二〇一六年五月五日発行 頒価五十円(本体四十六円)

東京都新宿区三栄町二十九 ニューワールドビルディング

神戸市長田区一番町二丁目一

「書標 ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2016年5月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第45号）



日本全国で
3,000万冊の品揃え!
丸善ジュンク堂書店

頒価 五十円（本体 四十六円）

ジュンク堂書店

淳久堂書店

M MARUZEN